

模倣と独立

夏目漱石

青空文庫

今日は図はからず御招あずかきに預ありまして突然参上致しました次第であります。私が、私は元この学校で育った者で、私にとってはこの学校は大分縁故えんこの深い学校であります。にもかかわらず、今日までこういう、即ち弁論部の御招待に預つて、諸君の前に立つた事は御座いませんでした。尤も御依頼も御座いませんでした。また遣やる気もありませんでした。ただ今私を御紹介下さった速水君はやみは知人であります。昔は御弟子で今は友達——いや友達以上の偉い人です。あります。しかし、知り合あいではありますけれども、速水さんから頼まれた訳でもありません。今度私が此処ここに現われたのは安倍あべ能成しげという——これも偉い人で、やはり私の教えた人です。

——その人が何でも弁論部の方と御懇意ごこんいだというので、その安倍能成君を通じての御依頼であります。その時私は実は御断りをしたかった。というのは、近来頭の具合が悪い。というよりも、頭の働き方がこういう所へ参つて、組織立つた御話をするに適しないようになっております。——一口に言えば、面倒臭めんどうくさいので、一応は御断りを致したのであります。けれども私の断り方がよほど正直だったので、——是非遣らなければならぬならば出るが、まあどうか許してもらいたい——こういう風に返辞をした。ところが是非遣らなければならぬから出る、というのです。後から考えると、余り私が正直過ぎたと思ひます。尤も、是非遣らなければならぬというのはどういふ訳だ、といつて問い詰めるほどの問

題でもありませんから、遣らなければならんものとして出て参りました。安倍君は君子であります。頼んだ事は引き受けさせようという方の君子。速水君も君子であります。これは頼まない方の君子、遠慮された方の君子でありますが。そういう訳で今日は出ましたので、演説をする前に言訳いいわけがましい事をいうのは甚だ卑怯なようでありますけれども、大して面白い事も御話は出来ないと思ひますし、また問題があつても、学校の講義見たように秩序の立った御話は出来兼ねるだらうと思ひます。安倍君曰いわく、何を言つたつて構いません、喜んで聴いているでしょう。

それに、私は此校ここで教師をしていたことがあります。その時分の生徒は皆恐らく今此所ここには一人もいないでしょう、卒業したで

しようけれども、しかし貴方がたはその後裔こうえいといえますか、跡あと続とつぎ見たような子分見たような者で、その親分をこの教場で度々虐いじめていた事などがあるから、その子か孫に当るような人などは何とも思っておらんので、チャンと準備をして出て来るほど旨うまく行かなかつた。

私は教師としてこの学校に四年間おりました。のみならずその以前には、貴方がたのように、生徒としてこの学校に——何年間おりましたか知らん——落第したと思っちゃいけません。元々私こは此所こへ這入はいつて来たのじゃない。この学校が予備門いといって丁度一ツ橋外そとにありました。今の高等商業のある界隈かいわい一面がこの学校兼大学であつた。明治十七年、貴方がたがまだ生れない先、

私は其所^{そこ}へ這入つたのです。それから——実は落第^{らくだい}しております。落第^{らくだい}して愚^ぐ図^ず愚^ぐ図^ずしている内にこの学校が出来た。この学校が出来て最も新しい所へいの一^{いち}番^{ばん}に乗り込んだ者は私——だけではないが、その一人は確かに私である。われわれの教室は本館の一^{いち}番^{ばん}北^{きた}の外^はれ^ずの、今食堂になつてゐる、あそこにありました。文科の教室で。それが明治二十二年位でした。その時分の事を今の貴方がたに比べると、われわれ時代の書生というものは乱暴で、よほど不良少年という傾^{かた}き——人によるとむしろ氣概^{きがい}があつた。天下国家を以て任じて威張^{いば}つておつた。われわれの年配の人は、いつも今の若い者はというような事をいつては、自分たちの若い時が一番偉かつたように思つてゐるけれども、私はそうは思わない。

今でもそうは思わない。貴方がたの前に立つてこうして御話をするとときは、なおそう思わない。貴方がたの方がわれわれ時代の者よりよほど偉い。先刻さつきから偉い偉いということ速水君が言われましたが、貴方がたの方が遥はるかに大人おとなしい、能く出来ていると思えます。われわれは実に乱暴であつた。その悪戯いたずらの例はいくらもあります。それを御話するために此処へ登つたんじゃないが、如何にわれわれが悪かつたかということざんげを懺悔するために御話するのであるから、その真似をしちやいけませんよ。現に彼処あそこに教場に先生の机がある。先ず私たちは時間の合間合間に砂糖わりの豌豆えんどうまめを買つて来て教場の中で食べる。その豌豆が残るとその残つた豌豆を先生の机の抽斗ひきだしの中に入れて置く。歴史の先

生に長沢市蔵という人がいる。われわれがこれを渾名あだなしてカップ
ードシヤとっている。何故カップードシヤというかという
なんでもカップードシヤとか何とかいう希臘ギリシヤの地名か何かある。
今は忘れてしまいましたが、希臘の歴史を教える時、その先生が
カップードシヤカップードシヤと一時間の内幾回となく繰り返す。
それでカップードシヤという渾名が付いた。この長沢先生の時間
と覚えておりますが、その先生がカップードシヤカップードシヤ
とボールドへ書くので、そのカップードシヤを書くうとしてチヨ
ークを捜すために抽斗を明けると、その抽斗の中から豆ががら
らと出て来たというような話がある。これは先生を侮辱ぶじよくした訳
ではありません、また先生に見せるためにわざわざ遣ったのでも

ありませんが、とにかくよほど予備門などにおつたわれわれ時代の書生の風儀ふうぎは乱暴でありました。現にこの学校の中を下駄げたで歩くのです。私も下駄で始終歩いた一人で、今はついでだから話しますが、私が此所に這入つた時に丁度杉浦重剛すぎうらしげたけ先生が校長でここ此所の呼び者になつていた。この時二十八歳だったかと思ひます。大変若くて呼び者であつたが、暫くするとこういう貼出しはりだがออกมาした。学校の中を下駄を穿はいて歩いてはいけない。それは当然の事ですが、わざわざ貼り出さなければならんほど下駄を穿いて歩いていたものと私は考える。然しかるに貼出しがあつて暫くしても、私は下駄を穿いて歩いてゐた。或日の事、丁度三時過ぎです。今頃で、もう誰もいまいと思つて、下駄を穿いて、威張つて歩けと

思つて、ドンドン歩いて行つた。すると廊下を曲る途端とたんに杉浦重剛さんにパタリと出会つた。私は乱暴書生ではない。極ごくく気の小さい大人しい者である。杉浦さんに出会つてどうしたと思います。私は急に下駄から飛び降りた。飛び降りたばかりではありません、飛び降りていきなり下駄を握つて一目散いちもくさんに逃げ出しました。だから一口も叱られもせずまた捉つかまえられもせず済んでしまつた。これは唯自分で覚えていてだけで人に話した事はありません、今日初めて位のものであります。この間あいだ或所で杉浦先生に久々ひさびさぶりで御目に掛つた。大分先生も年を取つておられる。その時私わがが、先生こういう事を覚えて御出おいでですか、私は下駄を穿いて歩いてこうこうだつたと御話したら、杉浦さんは、いやそれはどう

も大変な違いだ、私は下駄を穿いて学校を歩くことは大賛成である、穿いちやあならんという貼出しが出たのは、あれは文部省が悪い。とかく文部省はやかましい事を言うが、私はその下駄論者だったと言う。私も驚いて、杉浦さんが下駄論者だと仰おっしやるのはどういふ訳ですかと聞くと、先生の曰いわく、そもそも下駄は齒が二本しかない、それでいくら学校の中を下駄で歩いたところで、床に印する足跡というものは二本の齒の底だけである、しかるに靴は踵かかとから爪つまさき先まで足の裏一面が着くじゃないか。もしこれが両方とも同じ程度に汚すのであるならば、学校の床を汚す面積は靴の方が下駄より遙しきかに偉大である、だから私はその下駄で差支ないということしきを切りに主張したが、どうも文部省の当局が分ら

ないから、それでやむをえずああいう貼出しをした。それじゃ私は逃げる所どころでなかつた大いに賞められて然しかるべきであつた惜しい事をした、といつて笑つた。その時分は杉浦さんも二十八位でまだ若かつたから暴論を吐いて文部省を弱らせたのでしよう。下駄の方が宜よいという訳はないと考えるのです。まあそういうような時代を貴方がたが想像したら、随分乱暴な奴が沢山おつたということが御分りになるでしょうが、實際今よりも悪い悪いたずら戯たわぶな奴が沢山おつた。ストーブをドンドン焚たいて先生を火攻ひせめにしたり、教場を真ま闇くらにして先生がいきなり這入つて来ても何処も分らないような事をしたり、そういう所を経過して始めて此校ここへ這入つたものであります。

それから此校ここに二年ばかりおつて、大学に入つて、大分御無沙汰をして、それから外国に行きまして、外国から歸つて来て、復またた此校ここへ這入つた。故郷にききへ錦を着るといふほどでもないが、まあ教師になつて這入つた。そうして初めて教えたのが、今いう安倍能成君らであります。此校ここを出て、大学を出て、諸方を迂路うろついでいる時に教えたのが、此処ここにいる速水君であります。速水君を教える時分は熊本で教員生活をしておつた時で、漂泊ひょうはくせい生せいでありました。速水君を教えていた時分は偉くなかつた、あるいは偉い事を知らなかつたか、どつちかでしょう。とにかく速水君を教えた事は確かであります。形式的に。無論偉くない人だから本統ほんとうに啓発するほど教えなかつたが、教場に立つて先生と呼ばれ、生

徒と呼んだことは確かにある。なお自白すれば、熊本に來たてであります。私の前に誰か英語を受持つておつて、私はその後を引受けた。エドマンド・バークの何とかいう本でありますが、それは私の嫌きらひな本です。これ位解らない本はない。演説でも英吉利人イギリスが解るものならば日本人が字引を引いて解らないことはないはずである。が、實際解らない本です。その解らない物を教えた時に丁度速水君が生徒だったから、偉くない偉くないという考えが何時つまでも退のかないのかも知れません。それでその後英語も大分教えて年ねんこう功を積みましたが、速水君に断りますが、その後発達した今日の私の英語の力でも、あのバークの論文はやはり解らない。嘘だと思ふなら速水君があれを教えて御覽になれば直すぐ分る。――

—こんな下らない事を言つて時間ばかり経つて御迷惑でありました。ところが、実は時間を潰すために、そういう事を言うのであります。大した問題ありませんから。

それで、先刻演題という話でしたが、演題というようなものはないから、何か好^{いい}加減^{かげん}に一つ題は貴方がたの方で後で拵^{こしら}えて下さい。チョツと複雑過ぎて簡単な題にならんような高尚な事なんだろうと思う。何か御話しようと思いましたが、実は先刻申上げたような訳で、時間もなし、今日も人が来ますし、チツとも考えられない。それだからという事は余り大した事ではありません。が、もう少しの間、極^{ごく}雑^{ざつ}としたところを御話して御免蒙^{ごうむ}る事にしましょう。

私はこの間文展あいだぶんてんを見に行きました。（私は御存知の通り、職業が職業ですから、御話する事は一般の事でも、あるいは文芸と
いうことが例になったり、またその方から出しゅつ立たつする事が多い
かも知れませんが、その方に興味のない方かたには御気の毒ですが、
まあ仕方がない、御聴きを願います。）で、今申しましたように、
この間文展あいだを見に行きました。それで文展を見てチョツと感じま
した。どうも私は文部省の展覧会に反対をしたり、博士を辞した
り、甚はなはだ文部省に受けが悪い人間であります。今度の文展も公おおやけに
は書きませんでした。どうも大変面白くありませんでした。殊
に私は日本画の方で、まあそうだと思ひます。西洋画の方につい
てもいえばいえますが、その方は後にして置いて、日本画の方に

ついて申します。

——いっこう一向面白くなかった。あの画の内どれを見ても面白くない。

中には例外はありますけれども、どれを見ても面白くない。唯面白くないといつても分らぬから、訳をいわなくちやならんが、どれを見てもノツペリしている。ノツペリしているという意味は御お手際てぎわが好いというので、褒ほめていいのかといえ、そうではない。悪く言う意味で、御手際が大変好いのです。言葉を換えていえば、腕力はある、腕の力はある。それじゃ何処が悪いかと言え、頭がない。頭がなくて手だけで描いている。職人見たようなものがある。そうまでいうと御気の毒だから、それだけは公にしません。——これだけ公にしていれば沢山だが——私は別に画家や文展の

非難を遣^やつてゐるのではありません、画家を個人的に悪口を言つてゐる訳ではありません。ただ感じた事についてチヨツと必要だから申すのでありますが、唯ノツペリとしてゐる。例えばシミがなく、マダラがなく、ムラがなく、仕上げが綺麗に出来てゐる。ああいう手際というものは、でつちぼうこう丁稚奉公をして五年十年遣^やらなければ出来ないでしょうけれども、それ以外に何かあるかと聞かれても、私には分らない。丁度人間でいいますと、やはり紳士というものに能^よく似てゐると思う。紳士とはどんな者かという、紳士というものは、唯ノツペリしてゐる。顔ばかりじゃありません。マナーが——態度及び^{きよしどうさ}拳止動作が——ノツペリしてゐる人間で、手を出して握手をしたりする。下層社会の女などがよくあの人は

様子ようすが宜いいいということをいうが、様子ようすが宜いいい位で女に惚ほれられるのは、男子おとこの不面目ふめんぼくだと思おもいます。様子ようすが宜いいいというのは、人ひとを外そらさないということになる。唯ただ御座おざなりを言いうということになる。余あまりブツキラボーでない、当あたり触さわりが宜いいいというので御座おざいます。鮮あざやかで穩まことかで寔まことに宜いいい。それは悪わるい事とは思おもいません。そういう人ひとに接あしている方が野蠻やま人に接あしているよりは宜いいい。一口感情くちかんを害がいしても直すぐに擲なぐられるというような人より宜いいい。それを攻撃こうげきする訳わけじゃありませんが、しかしそれだけでは人格問題じんかくもんだいじゃない。人格問題じんかくもんだいじゃないというのは——随分悪わるい事をして、人の金かねをただ取とるとか、法律はうりつに触ふれるような事ことをしないまでも非道ひどいずるい事ことをしたり、種々雑多しゅしゅざたな事ことをやつて、立派りっぺいな家いへに這入はいつ

て、自動車なんぞに乗って、そうして会って見ると寔まことに調子が好くて、品ひんが好くて、ノツペリしている。そうして人格というものはどうかというと、余り感かんぶく服出来ない人が沢山ありましよう。それが紳士だと思っではいけません。けれどもそういう者が紳士として通用している。つまり人格から出た品位を保っている本ほん統とうの紳士もありましようが、人格というものを度外どがいに置いて、ただマナーだけを以て紳士だとして立派に通用している人の方が多いでしよう。まあ八割位はそうだろうと思います。それで文展の絵を見てどっちの方の紳士が多いかというと、人格の乏しい絵だ。人格の乏しい絵だ。人ひと格の乏しい絵だといって、何も泥棒が絵描になつているといふような訳ではない。そういう侮辱の意味じゃない。けれども

尊敬した意味じゃ無論ない。大変どうも頭が——何と行って宜よいか——氣け高だいというものが無い。御覧になつても分る。氣高けいといふことは富士山や御釈迦おしやかさま様や仙人などを描いて、それで氣高けいといふ訳じゃない。仮令たと馬まを描いても氣高けい。猫をかいたら——なお氣高けい。草そう木も禽きん獸じゆう、どんな小さな物を描いても、どんなインシグニファイカントな物を描いても、氣高けいものはいくらもありません。そういうような意味の絵にはどうも欠乏し切っているのが文展である。これを逆にいうと、そういう絵を排斥しているのが文展である。こういう訳であるから、それが一列一帯にチャンと御手際だけは出来ておらないといけない。御手際が出来てない物は皆落第する——のですかどうか分からないが、とにかくそういう

うことを私は文展において認め、かつその文展における絵の特色と人間の特色と相對していわゆるゼントルマンに比較して考えたのであります。

それからその次に或人^{ある}が外国から歸つて展覽會を開いた、それを見に往きました。二人でありました。その一人の絵を見ると、油絵で西洋の色々な絵を描いている。アンプレツシヨニストのよ
うな絵も描いている。クラシカルな、ルーベンスなどに非常に能
く似たような絵も描いている。仏蘭西派^{フランス}であるが、あれを公平に
考えて見ると、彼の人は何処^{どこ}に特色があるだろう。他人^{ひと}の絵を描
いている。自分というものが何処^{どこ}にもないようですね。巧^{うま}い拙^{まず}い
にかかわらず、他人の描いたようなものはいくらでも描くんです

が、それじゃ自分は何所どこにあるかという、チヨツと何所にあるか見えないような絵を展覧会で見せられました。その次にもう一つの外国から帰った人の絵を見た。それは品ひんの宜よい、大人おとなしい絵でした。それで誰が見ても、まあ悪感情を催さない絵でありました。私はその中の一つを買って来て家の書齋に掛けようかと思いましたが、止よしました。けれども、まあ買っても宜いとは思いませんでした。何故買っても宜いといいますが、相当に出来ているからです。内へ持って来て掛けるのは何故かという、英吉利風イギリスふうの絵なら絵を、相当に描きこなしておつて、部屋の装飾として突飛とつびでない、丁度平凡でチヨツと好よかろうと思つたから買って来ようかと思つたけれども、買って来ませんでした。その人の絵は誰が見

ても習った絵だということが分る。習って或程度まで進んだ絵である。それだから見苦しくない、ということとは分る。その代りその作者を俟^まつて初めて描けるような絵は一つもないのです。例えばその内の一^{ひとつ}を選んで内に掛けるにしても、その特別な画家を煩^{わづら}わさないでも、外^{ほか}の人に頼んでも、それと同じような絵が出来そうな絵でありました。それから私はもう一つ見ました。これは日本にいる人で、日本にいる人の或^{ある}外国の絵でありました。前の二つは帝国ホテル及び精^{せい}養^{よう}軒^{けん}という立派な料理屋で見ました。御客様もどうも華やかな人が多い。中には振^{ふり}袖^{そで}を着ている女などがおりました、あんな女などに解るのかと思うほどでした。第三に見たのは、これはどうも反対です。所は読売新聞の三階で

した。見物人はわれわれ位の紳士だけれども、何だか妙な、絵かきだか何だか妙な判じものはんのような者や、ポンチ画の広告見たよ
うな者や、長いマントを着て尖ったとがような帽子を被ったかぶ和蘭の
植民地にいるような者や、一種特別な人間ばかりが行っている。
絵もそういう風な調子である。見物人も綺麗な人は一人もいない。
どうもその絵はそれで或程度まではチャンと整うととのてはいないと思
います。しかし、自分が自分の絵を描いている、という感じは確
かにしました。しかしその色の汚い方の絵は未成品みせいひんだと思いま
す。それだから同情もありそれを描いた人に敬意も持ちますけれ
ども、わざわざ金を出して内に買って来て書齋に掛けようと思わ
ない絵ばかりでありました。

こういう風に色々違う絵があるからして、その点から出立しゅったつして御話をしましょう。——それで文展の画家や西洋から帰つて来た二人は自分で自分の絵を描かない。それから今の日本の方のは自分で自分の絵は描くけれども未成品である。感想はそれだけです。がね。それについてそれをフィロソフィーにしよう——それをまあこじつけてフィロソフィーにして演説の体裁ていさいにしようというのです。どういう風にこじつけるかが問題であります。それがうま旨く行けば聴かれそうな演説である。巧うまく行かなければそれだけの話である。まあどういふ風に片付けるかという御手際の善悪などはどうでも宜よいのですから。

人間という者は大変大きなものである。私なら私一人がこう立

った時に、貴方がたはどう思います。どう思うといった所で漠然たるものでありますが、どう思いますか。偉い人と速水君は思うか知らんが、そんな意味じゃない。私は往來を歩いている一人の人を捉つかまえてこう觀察する。この人は人間の代表者である。こう思います。そうでしょう神様の代表者じゃない、人間の代表者に間違いはない。禽きんじゆう獸じゆうの代表者じゃない、人間の代表者に違いない。従つて私が茲ここ処こにこう立っていると、私はこれでヒューマン・レースをレプレゼントして立っているのである。私が一人で沢山ある人間を代表していると、それは不可いん君は猫だと意地悪かくいうものがあるかも知れぬ。もし貴方がたがこういつたら、そうしたら、いや猫じゃない、私はヒューマン・レースを代表して

いるのであると、こう断言するつもりである。異存はないでしょう。それならば、それで宜よろしい。

同時にそれだけかというところでもない。じや何を代表しているかというところ、その一人の人は人間全体を代表していると同時にその人一人を代表している。詰らない話だがそうである。私はこうやって人間全体の代表者として立っていると同時に自分自身を代表して立っている。貴方がたでもなければ彼方かなたがたでもない、私は一個の夏目漱石というものを代表している。この時私はゼネラルなものじゃない、スペシアルなものである。私は私を代表している、私以外の者は一人も代表しておらない。親も代表しておらない、子も代表しておらない、夫子ふうし自身を代表している。

否^{いな}夫子自身である。

そうすると、人間というものはそういう風に二通りを代表している——という^{ごへい}と語弊があるかも知れませんが——二通りになるでしょう。其^{そこ}処です其^{そこ}処です、それをいわないと能^よく解らない。

それでこのヒューマン・レースの代表者という方から考えて、人間という者はどんな特色、どんな性質を持っているか。第一私は人間全体を代表するその人間の特色として、第一に模倣ということ^をを挙げたい。人は人の真似をするものである。私も人の真似をしてこれまで大きくなった。私の所の小さい子供なども非常に人の真似をする。一歳違いの男の兄弟があるが、兄貴が何か呉^くれろといえ^ば弟も何か呉れろという。兄が要^いらないといえ^ば弟も要

らないという。兄が小^{しょうべん}便がしたいといえれば弟も小便をしたいという。それは実にひどいものです。総^{すべ}て兄のいう通りをする。丁度その後から一步一步ついて歩いているようである。恐るべく驚くべく彼は模倣者である。

近頃読んだ本でありませんがマンテガツツアの『フイジオロジ
ー・エンド・エクスプレシヨン』という本の中にイミテーション
ということについて例を沢山挙げてありましたが、私は今一々^{いちいち}
人間という者は真似をするものであるということの沢山な例を記
憶しておりませんが、茲^{ここ}処に二つ三つあります。例えば、一人の
人が往来で洋傘を広げて見ようとする、同行している隣りの女
もきつと洋傘を広げるといふ。こういう風に一般に或^{ある}程度までは

そうです。往来で空を眺めていると二人立ち三人立つのは訳はなくやる。それで空に何かあるかというところ、飛行船が飛んでいる訳でも何でもない。けれども飛行船が飛んでいるとか何とかいえば、大勢の群集が必ず空を仰いで見る。その時に何か空中に飛行船でも認めしむることが出来ないとも限らない。

それほど人間という者は人の真似をするように出来ている情けないものであります。それでその、人の真似をするということは、子供の内から始まって、今言ったような些末さまつの事柄ばかりでない、道徳的にもあるいは芸術的にも、社会上においてもそうである。無論流行などは人の真似をする。われわれが極ごくく子供の内は東京の者はこんな薩摩さつま飛白がすりなどは決して着せません。田舎者でなければ

ば着ないものでした。それを今の書生は大抵皆薩摩飛白を着る。安いからか知りませんが、皆着るようになった。それから一時白はおりい羽織ひもの紐けいとの毛糸けいとか何かの長いのをこう——結んで胸から背負くびつて頸くびに掛けておつた。あれも一人遣やるとああなるのであります。私たちの若い時は羽織もんの紋もんが一つしきやないのを着て通つうじん人とか何とかいつて喜んでいた。それが近頃は五つ紋をつけるようになって来た。それも大きなのが段々小さくなったようだが、近頃どの位おくになつてゐるのか。私は羽織の紋が余り大きいから流行おに後くれぬように小さくした位それほど流行というものは人を圧迫して来る。圧迫するのじゃないが、流行にこつちから赴おもむくのです。イミテーターとして人の真似をするのが人間の殆ど本能です。人の真似が

したくなるのです。こういう洋服でも二十年前の洋服は余り着られない。この間着^{あいだ}ていた人を見ただけでも可笑^{おか}しいです。あまり見つとも宜^よいものではない。殊に女なんぞは、二十年前の女の写真なんぞは非常に可笑しい。本来の意味では可笑しいとは自分で思っていないけれども、熟^{つくづく}々見ると、やはり模倣ということに重きを置く結果、どうもその自分と異^{ことな}つた物、あるいは世間と異つたものは可笑しく見えるのであります。そういう風にそれを道徳上にも応用が出来ます。それから芸術上は無論の事です。そんな例は沢山挙げても宜^よいけれども、時間がないから略して置きます。とにかく大変人は模倣を喜ぶものだということ、それは自分の意志からです、圧迫ではないのです。好^{この}んで遣る、好んで模

倣をするのです。

同時に世の中には、法律とか、法則とかいうものがあつて、これは外圧的に人間というものを一束ひとたばにしよつとす。貴方がたも一束にされて教育を受けている。十把じっぱひと一ひとからげにして教育されてる。そうしないと始末に終おえないから、やむをえず外圧的に皆さんを圧迫しているのである。これも一種の約束で、そうしないと教育上に困難であるからである。その約束、法則というものは政治上にも教育上にもソシヤル・マナーの上にもある。飯を食べるのにサラサラグチャグチャは不可いけないという。そういうのはこれは法則でしょう。それから道德の法則、これは当り前の話で、金を借りればどうしても返さねばならぬようになってる。

それから芸術上の法則というのがある。これがまた在来の日本画だとか、御能おのうだとか、芝居の踊りだとかいうものには、非常に究きゆうくつ

屈かたな面倒な固かたまった法則があつて、動かすことが出来ないよ
うになつております。それらの例を一々挙げると宜いのですが、それは一々挙げません。例を省はぶくと詰はまらないものになりますが、早く済みますから、詰はらなくして早く切り上げてしまおうと思う。

それから、法則というものは社会的にも道德的にもまた法律的にもあるが、最も劇はげしいのは軍隊である。芸術にでも総すべてそういうような一種の法則というものがあつて、それを守らなければならぬように周囲が吾人ごじんに責めるのであります。一方ではイミテーション、自分から進んで人の真似をしたがる。一方ではそういう

法則があつて、外の人から自分を圧迫して人に従わせる。この二つの原因があつて、人間というものの特殊の性というものは失われて、平等なものになる傾きがある。その意味で私なら私が、人間全体を代表することが出来る資格を有^もち得るのであります。

私は人間を代表すると同時に私自身をも代表している。その私自身を代表しているという所から出^{しゅつ}立^{たつ}して考えて見ると、イミテーションという代りにインデペンデントという事が重きを為^なさなければならぬ。人がするから自分もするのではない。人がさうすれば——他人^{ひと}は朝飯に粥^{かゆ}を食う俺はパンを食う。他人は蕎麦^{そば}を食う俺は雑^{ぞう}を食う、われわれは自分勝手に遣^やらう御前^{おまえ}は三杯^{ばい}食う俺は五杯食う、というようなそういう事はイミテーションで

はない。他人が四杯食えば俺は六杯食う。それはイミテーションでないか知らぬが、事によると故意こいに反対することもある。これは不可いけない。世の中には奇人きじんというものがありました、どうも人並の事をしちや面白くないから、何でも人とは反対をしなれば気が済まない。中には広告するためにやる奴もある。普通のこゝでは面白くないから、何か特別な事をして見たいというので、髪の毛を伸ばして見たり、冬夏なつぼう帽かぶを被かぶつて見たり——それは此こ処この生徒などにもよくある。が、あれは無頓着むとんじやくから来るのでしよう。人が冬帽かぶを被かぶつていふという事に気が付けば自分も被かぶりたくなるでしょう。故意に俺は夏帽を被るといった日にはよほど奇き人じんとなる。私のここにインデペンデントというのは、この故意を

取り除ける。次には奇人を取り除ける。気が付かないのも勘^{かんじよ}定^うの中に這入らない。それじゃあどうというのがインデペンデントであるか。人間は自然天然に独立の傾向を有^もっている。人間は一方でイミテーション、一方で独立自尊、というような傾向を有^もっている。その内で区別して見れば、横^{おうちやく}着^もな奴と、横着でない奴と、横着でないけれども分らないから横着をやつて、まあ朝八時に起きる所を自然天然の傾向で十時頃まで寐ている。それはインデペンデントには違^{はな}いが、甚^なだどうも結構でない事かも知れません。それは我儘、横着であるが自然でもある、インデペンデントともなるけれども、これも取り除^{のぞ}けということになる。最後に残るのは——貴方がたの中で能^よく誘惑^よということを言いま

しよう。人と歩調ほちようを合あわして行いきたいという誘惑を感じても、

如何いかんせんどうも私にはその誘惑に従う訳に行かぬ。丁度ちようど跛を兵

いしきたいそう

式しき体操たいそうに引き出したようなもので、如何せんどうも歩調ほちようが揃そろ

わぬ。それは、諸君と行動を共にしたいけれども、どうもそう行

かないので仕方がない。こういうのをインデペンデントというの

です。勿論それは體質上のそういう一種のデマンドじゃない、精

神的の——ポジチブな内心のデマンドである。あるいはこれが道

徳上に発現して来る場合もあります。あるいは芸術上に発現

して来る場合もあります。精神的になつて来ると——そうで

すね、古臭ふるくさい例を引くようでありますが、坊さんというものは

にくじきさいたい

肉食妻帯にくじきさいたいをしない主義であります。それを真宗しんしゅうの方では、

ずっと昔から肉を食った、女房を持つている。これはまあ思想上の大革命でしょう。親鸞しんらん上人しょうにんに初めから非常な思想があり、非常な力があり、非常な強い根柢こんていのある思想を持たなければ、あれほどの大改革は出来ない。言葉を換えて言えば親鸞は非常なインデペンデントの人といわなければならぬ。あれだけのことをするには初めからチャンとした、シツカリした根柢がある。そうして自分の執るべき道はそうでなければならぬ、外の坊主ほかと歩調を共にしたいけれども、如何いかんせん独り身の僕は唯女房を持ちたい肉食をしたいという、そんな意味ではない。その時分に、今でもそうだけでも、思い切つて妻帯し肉食をするということを公言するのみならず、断行して御覧なさい。どの位迫害を受けるか分

らない。尤も^{もつと}迫害などを恐れるようではそんな事は出来ないでしよう。そんな小さい事を心配するようでは、こんな事は仕切れないでしよう。其所^{そこ}にその人の自信なり、確乎^{かくこ}たる精神なりがある。その人を支配する権威があつて初めてああいうことが出来るのである。だから親鸞上人は、一方じゃ人間全体の代表者かも知らんが、一方では著^{いちじる}しき自己の代表者である。

今は古い例を挙げたが、今度はもつと新しい例を挙げれば、イブセンという人がある。イブセンの道德主義は御承知の通り、昔の道德というものはどうも駄目だという。何が駄目かといえ、あれは男に都合の宜^よいように出来たものである。女というものは眼^{がんちゆう}中に置かないで、強い男が自分の権利を振り廻すために自

分の便利を計るために、一種の制裁なり法則というものを拵えて、弱い女を無視してそれを鉄窓てつそうの中に押し込めたのが今日までの道徳というものであるといっている。それでイブセンの道徳というものはふたいろ二色にしなければならぬのである。男の道徳、女の道徳というようにしなければならぬ。女の方から見ますれば、それが逆にまあならなければならないというのです。その思想、主義から出発して書いたものがイブセンの作の中にある。最も著しい例は、『ノラ』というようなものであります。それがイブセンという人は人間の代表者であると共に彼自身の代表者であるという特殊の点を發揮している。イミテーションではない。今までの道徳はそうだから、たといその道徳は不都合であるとは考えていて

も、別に仕様ししょうがないからまあそれに従つて置こう、というような
余裕のある、そんな自己ではない。もつと特別な猛烈な自己であ
る。それがためイブセンは大變迫害を受けたという訳であります。
無論事實不遇ふぐうな人でありました。そののみならずあの人は特殊な
人で、人間全体を代表しているというより彼自身を代表している
方がよほど多い。そこで国を出て諸方を流浪して、偶たまに国へ歸つ
ても評判が宜よくないから、国へは滅多めったに歸らなかつた。或時国へ
歸つて来た。国へ歸つても家がないから宿屋に泊つている。その
時ブランデスという人がイブセンが来たから歓迎会を開こうとい
うと、イブセンはそんな歓迎会などは御免蒙ると言つている。し
かし折角せつかくの催しで人数も十二人だけだからといって、漸ようやくイブ

センを説き伏せた。面倒を省くためにイブセンの泊っている宿屋で、帝国ホテル見たようなところで開くということになり、それでいよいよ当日になって丁度宜い時刻になったから、ブランドスはイブセンの室に行つてドアをコツコツと叩いて、衣服の用意は出来たかと外から聞いたら、イブセン曰く衣服などは持つておらぬ、自分は決して服装などは改めた事はない。シャツを着ている。シャツといつても露西亞^{ロシア}辺では家の中ではこんな冬の日には温度が七十度位にしてある。本でも読む時は上衣をとっている。外に出る時はこういうものを着るでしょう。それでシャツを着ているのは宜いが、皆んなは燕尾服^{えんびふく}を着て来ているのだからという、イブセンは自分の行李^{こくり}の中には燕尾服などは這入っていない

い、もし燕尾服を着なければならぬようなら御免蒙るといふ。御客を呼んで、その御客が揃そろっているのに、御免を蒙られては大変だから——そんなことを言わないでどうか出てもらいたい、それじゃ出るといふ事になったが、ブランデスが実は十二人だった所が、段々と人数が殖ふえて二十四人になったといふと、そんな嘘を吐つくならもう出ないといふ。実に手古摺てこずらされたといふことをブランデス自身が書いてある。そんな事で色々面倒なことがあつた末、ようよう連れて行つてチャンと坐らせた。ところが大たい将しょう大いにふくれていて一口も口を利かない、黙っている。まだ面白い話があるけれどもまあこれ位で切り上げてしましましょう。とにかく人間を代表しても獣けだものを代表しても、イブセンはイブセンを

代表していると言った方が宜い。イブセンはイブセンなりと言った方が当っている。そういう特殊な人であります。この話は幼稚であります。今のイブセンの道德の見解からいっても、イブセンはイミテーションという側の反対に立った人といわなければならぬ訳であります。

それで、人間にはこの二通りの人がある。というと、片方と片方は紅白見たように別れているように見えますが、一人の人がこの両面を有^もっているということが一番適切である。人間には二種の何とかがあるということ^よを能くいうものですが、それは大變間違いだ。そうすると片方は片方だけの性格しか具^{そな}えていないようになる。議論する人はそういう風になるから、あとがどうも事実

から出発していない議論に陥ってしまふ。とにかく二通りの人間があるということを使うが、これはこの両面を持つていっているというのが、これが本統ほんとうの事でしょう。いくらオリヂナルの人でもイミテーションの分子を何処かに持つてゐる。イミテーションの側に立つて考えると、これはどういう人がイミテーターかという、要するにイミテーターというものは人の真似をする。それだから自分に標準はない。あるいはあつても標準を立て通すだけの強い猛烈な勇気を欠いているか、どつちかなのである。しかしながらインデペンデントの側の方は、自分に一種の目安めやすがある。アイデアル・センセーション、それが個人的になつておつて、とにかくそれを言い現わし、それを実行しなければいとも立つてもどうし

てもいられない。風ふう変りがわではあるが、人からいくら非難されても、御前おまえは風変りだと言われても、どうしてもこうしななければいられない。藪やぶ睨みにらは藪睨みで、どうしても横ばかり見ている。これはインデペンデントの方の分子を余計有もっている人である。だからこういう人というものは寔まことに厄やっかい介なもので、世の中の人と歩調を共にすることは出来ない。おい君湯に行こう、僕は水を被かぶる、君散歩に行かないか、俺は行かない座ざ禅ぜんをする、君飯を食わんか、僕はパンを食う、そういうようなインデペンデントな人になつては手が付けられない。到底一緒に住む事は困難である。しかし人に困難を与えるから気の毒な感じがないかというところではない。唯そんな事は考えていられないのでしよう。それが

本統のインデペンデントの人といわなければならぬ。厄介ではあるけれども、イミテートする人あるいは自己の標準を欠いていて差さし障さわりのない方が間違いがなくて安心だというような人に比べれば、自己の標準があるだけでもこっちの方が恕ゆるすべく貴たかぶべし——といったらどんな奴が出て来るか分らぬが、事実貴たかぶべき人もありましよう。とにかくインデペンデントの人にはまあ恕ゆるすべきものがあると思うです。

元来私はこういう考えを有もっています。泥棒をして懲ちやうえき役にされた者、人殺をして絞こうしゆだい首ゆだい台のぞに臨おんんだもの、——法律上罪になるといふのは徳義上の罪であるから公おおやけに所しよけい刑けいせらるるのであるけれども、その罪を犯した人間が、自分の心の径路けいろをありのまま

に現わすことが出来たならば、そうしてそのままを人にインプレッスする事が出来たならば、総ての罪悪すべというものはないと思う。総て成立しないと思う。それをしか思わせるに一番宜よいものは、ありのままをありのままに書いた小説、良く出来た小説です。ありのままをありのままに書き得る人があれば、その人は如何なる意味から見ても悪いということを行おこなったにせよ、ありのままをありのままに隠しもせず漏らしもせず描き得たならば、その人は描いた功德くどくに依まつて正まに成じょうぶつ仏ぶつすることが出来る。法律には触れまず懲役にはなりません。けれどもその人の罪は、その人の描いた物で十分に清められるものだと思う。私は確かにそう信じている。けれどもこれは、世の中に法律とか何とかいうものは要いらない、

懲役にすることも要らない、そういう意味ではありませんよ。それは能くよ申しますと、如何に傍はたから見ても、氣きちがい狂じみた不道德な事を書いて、不道德な風儀を犯しても、その経過を何にも隠さずに銜てらわずに腹の中をすっかりそのままに描き得たならば、その人はその人の罪が十分に消えるだけの立派な証明を書き得たものだと思つてゐるから、さつきいつたような、インデペンデントの主義標準を曲げないということは恕ゆるすべきものがあるといったような意味において、立派に恕すべきであるという事が出来る、私は考えるのであります。

しかしこういう風にインデペンデントの人というものは、恕すべく或時は貴たつとむべきものであるかも知れないけれども、その代り

インデペンデントの精神というものは非常に強烈でなければならぬ。のみならずその強烈な上に持つて来て、その背後には大變深い背景を背負つた思想なり感情なりがなければならぬ。如何となれば、もし薄弱なる背景があるだけならば、徒にいたずらインデペンデントを悪用して、唯世の中に弊害を与えるだけで、成功はとも出
来ないからである。

此ここ処に成功という意味についても説明を要する。また強い背景という事についても説明を要するが、強い背景というものは何だということ、それは別なものではありません。例えば私なら私が世の中の仕来りしきたりに反したことを、断言し、宣言し、そうしてそれを実行する。その時に、もしそれが根柢のない事を遣やつてゐるなら

ば、如何に私自身にはそれが必然の結果であり、私自身には必要であろうとも、人間として他の人のためにならない。何らの影響を与える事が出来ない。何らの影響を現われたるインデペンデントなことをして、最後に文字に現われたるインデペンデントで死ななければならぬ。人には何らの影響を与えざるのみならず、そのインデペンデントは人の感情を害し、法則というものに一種の波動を起して、人に一種の不愉快を醸かもさせるに過ぎないのであります。それではどんな風な深い背景を有もつていなければならぬかというのと、例えば非常に個人主義のよような仏蘭西フランス革命でも、明治改革でも宜よろしゅう御座います。徳川家

が將軍に成なつた末で余り勢いは強くなかつたけれども、とにかく將軍というものが政權を持つておつてその上に天子てんしさま様がおられるという。これは一般の法則でないという処から、習慣的に続いて来た幕府というものを引つ繰り返したというのは、その引つ繰り返るといふ時の人の胸きょうちゆう中に同情があつて、その同情を惹ひき起すといふ事が出来なければ、あれは成功は出来ないのである。だから徒いたずらにインデペンデントといふことは不可いけない。人間の自覺といふものは一步先へ先へと来るものである。一步遅れたら人より一步遅れて歩ある行かなければならない。人は相当の時期が来ればその通りになるべき運命を持つているのだから、一步先に啓発しなければならぬ。それが強い深い背景といえばいえる。それがな

ければ成功は出来ない。

成功ということについて歴史などの例を挙げたが、誤解される
といけないからここに手近い例をもう一つ挙げて置きたい。学校
騒動があつてその学校の校長さんが代る。この学校ではありませ
んよ。そうすると後に新しい校長さんが来ましょう。そうしてそ
の学校騒動を鎮めしずに掛かる。その時は色々思案もやりましよう計画
も要いりましよう。刷さつ新しんも色々ありましよう。そうして旨うまく往いけ
ばあの人は成功したといわれる。成功したというと、その人の遣や
りりくちが刷新でもなく、改革でもなく、整理でもなく、その結
果が宜いと、唯その結果だけを見て、あの人は成功した、なるほ
どあの人は偉いということになる。ところが騒動が益ます大ますきくなる。

そうすると今まで遣^やつたその人の一切の事が非難せられる。同じ事を同じように遣^やつても、結果に行つて好ければ成功だというが、同じ事をして結果に行つて悪いと、直ぐにあの人の遣^や口は悪いという。その遣^{やりかた}方の實際を見ないで、結果ばかりを見ていうのである。その遣^よ方の善^よし悪^あしなどは見ないで、唯結果ばかり見て批評をする。それであの人は成功したとか失敗したとかいうけれども、私の成功というのはそういう単純な意味ではない。假^{たと}令^いその結果は失敗に終つても、その遣^よることが善いことを行い、それが同情に値いし、敬服に値いする觀念を起させれば、それは成功である。そういう意味の成功を私は成功と^よいたい。十字架の上^{はりつけ}に磔^{はりつけ}にされても成功である。こういうのは余り宜^よい成功ではない

かも知らぬが、成功には相違ない。これはテンポラルな意味で宗教的の意味ではない。乃木^のさんが死にましたろう。あの乃木さんの死というものは至誠^{しせい}より出^いでたものである。けれども一部には悪い結果が出た。それを真似して死ぬ奴が大変出た。乃木さんの死んだ精神などは分らんで、唯形式の死だけを真似する人が多いと思う。そういう奴が出たのは仮に悪いとしても、乃木さんは決して不成功ではない。結果には多少悪いところがあっても、乃木さんの行為の至誠であるということはあなた方を感動せしめる。それが私には成功だと認められる。そういう意味の成功である。だからインデペンデントになるのは宜いけれども、それには深い背景を持ったインデペンデントとならなければ成功は出来ない。

成功という意味はそう言う意味でいつている。

それで人間というものには二通りの色いろあ合があるということは今申した通りですが、このイミテーションとインデペンデントですが、片方はユニター——人の真似をしたり、法則に囚とらわれたりする人である。片方は自由、独立の径路を通って行く。これは人間のそのバリエイターを形作っている。こういう両面を持っているのではなくありますけれども、先ず今日までの改正とか改革とか刷新とか名のつくものは、そういうような意味で、知識なり感情なり経験なりを豊富にされる土台は、インデペンデントな人が出て来なければ出来ない事である。もしそれが出来なかつたならば、われわれはわれわれの過去の歴史を顧かえりみて如何に貧弱であるかと

いうことを考えれば、その人は如何にわれわれの経験を豊富にしてくれたかということが能く分るのであります。その意味でインデペンデントというものは大変必要なものである。私はイミテーションを非難しているのではないけれども、人間の持つて生れた高尚な良いものを、もしそれだけ取り去ったならば、心の発展は出来ない。心の発展はそのインデペンデントという向上心なり、自由という感情から来るので、われわれもあなた方もこの方面に修養する必要がある。そういうことをしなくても生きてはいられません。また自分の内心にそういう要求のないのに、唯その表面だけ突飛なことを遣る必要は無論ない。イミテーションで済まし得る人はそれで宜しい。インデペンデントで働きたい人はインデペ

ンデントで遣つて行くが宜しい。インデペンデントの資格を持つておつて、それを抛ほうつて置くのは惜しいから、それを持っている人はそれを発達させて行くのが、自己のため日本のため社会のため幸福である。こういうのです。

繰り返して申しますが、イミテーションは決して悪いとは私は思つておらない。どんなオリヂナルの人でも、人から切り離されて、自分から切り離して、自身で新しい道を行ける人は一人もありません。画かきの人の絵などについて言つても、そう新しい絵ばかり描けるものではない。ゴーガンという人は仏蘭西フランスの人ですが、野蛮人の妙な絵を描きます。仏蘭西に生れたけれども野蛮地に這入つて行つて、あれだけの絵を描いたのも、前に仏蘭西にお

った時に色々の絵を見ているから、野蛮地に這入つてからあれだけの絵を描くことが出来たのである。いくらオリヂナルの人でも前に外の絵を見ておらなかつたならば、あれだけのヒントを得ることは出来なかつたと思う。ヒントを得るといふこととイミテートするといふこととは相違があるが、ヒントも一歩進めばイミテーションとなるのである。しかしイミテーションは啓発するようなものではないと私は考えている。

それから、イミテーションは外圧的の法則であり、規則であるといふ点から、唯打ち^う毀^{こわ}して宜^よいというものではない。必要がなくなれば自然に毀れる。唯、利益、存在の意義の^{けい}軽^ち重^{じゆう}によつて、それが予期したより十年前に自ら^{みずか}倒れるか、十年後に倒れる

かである。またオリヂナルの方が早く自然に滅亡するか、イミテーションの方が先に滅亡するかであつて、大した違いはない。片方だけを悪いとは決して言わない。両方とも各々 《おのおの》存在するには存在すべき理由があつて存在しているのである。殊に教育を受ける諸君の如きものに向つて規則をなくしたらとても始末が付かない。また兵式体操なども出来ない。子供の内は親のいうことばかり聞いておつても、段々一人前いちにんまえになつて来るとインデペンデントというものは自然に発達して来る。また発達してもしか然るべきような時期に到着するのであります。一いちが概に唯インデペンデントであるということを主張するのではないのであります。

けれども近來の傾向を見て、世の中の調子を見て、大体はイン

デペンデントに賛成である。今日の状況を以て学校の規則を蔑視して自分勝手にしろというのではありません。それは別問題ですが、今の日本の現在の有ありさま様から見て、どつちに重きを置くべきかという、インデペンデントという方に重きを置いて、その覚悟を以てわれわれは進んで行くべきものではないかと思う。われわれ日本人民は人真似をする国民として自ら許みずかしている。また事実そうになっている。昔は支那の真似ばかりしておったものが、今は西洋の真似ばかりしているという有様である。それは何故かという、西洋の方は日本より少し先へ進んでいるから、一般に真似をされているのである。丁度あなた方のような若い人が、偉い人と思つて敬意を持つている人の前に出ると、自分もその人のよ

うになりたいと思う——かどうか知らんが、もしそう思うと仮定すれば、先輩が今まで踏んで来た径路を自分も一通り遣やらなければ茲ここ処こに達せられないような気がする如く、日本が西洋の前に出ると茲ここ処こに達するにはあれだけの径路を真似て来なければならぬ、こういう心が起るものではないかと思う。また事実そうである。しかし考えるとそう真似ばかりしておらないで、自分から本式のオリヂナル、本式のインデペンデントになるべき時期はもう来ても宜よろしい。また来るべきはずである。

日露戦争というものは甚はなはだオリヂナルなものであります。インデペンデントなものであります。あれをもう少し遣やつておつたならば負けたかも知れない。宜よろい時に切り上げた。その代り沢山金

は取れなかった。けれどもとにかく軍人がインデペンデントであるということはあれで証拠立てられている。西洋に対して日本が芸術においてもインデペンデントであるという事ももう証拠立てられても可いよ時である。日本は動もすやれば恐露病きょうろびょうに罹かつたり、支那のような国までも恐れているけれども、私は軽蔑している。そんなに恐しいものではないと思つている。これはあなた方を奨励するためにこういうことを言つているのである。それからまた日本人は雑誌などに出るちよつとしたさくぶつ作物を見て、西洋のものと殆ど比較にならぬというが、それは嘘です。私の書いた小説なども雑誌に出ますが、それをいうのじやない。間違えられては困る。それ以外のもので、文壇の偉い人の書いたものは大抵偉いの

です。決して悪いものじゃありません。西洋のものに比べてちつとも驚くに足らぬ。唯^{たて}豎に読むと横に読むだけの違いである。横に読むと大変巧いように見えるというのは誤解であります。自分でそれほどのオリヂナリティーを持っていながら、自分のオリヂナリティーを知らずに、あくまでもどうも西洋は偉い偉いと言わなくても、もう少しインデペンデントになって、西洋をやつつけるまでは行かないまでも、少しはイミテーションをそうしないようにしたい。芸術上ばかりではない。私は文芸に関係が深いからとかく文芸の方から例を引くが、その他においても決して追^おつ着^つかないものはない。金の問題では追つ着かないか知らぬが、頭の問題ではそんなものではないと思つてゐる。あなた方も大学を御^お遣^や

りになって、そうして益ますますインデペンデントに御遣りになって、新しい方の、本当の新しい人にならなければ不可いけない。蒸返むしかえしの新しいものではない。そういうものではないけない。

要するにどっちの方が大切であろうかという、両方が大切である、どっちも大切である。人間には裏と表がある。私は私をここに現わしていると同時に人間を現わしている。それが人間である。両面を持っていなければ私は人間とはいわれなと思う。唯どっちが今重いかというと、人と一緒になって人の後に喰つ付いて行く人よりも、自分から何かしたい、こういう方が今の日本の状況から言えば大切であろうと思うのであります。

文展を見てもどうもそっちの方が欠乏しているように見えるの

で、特にそういう点に重きを置いて、御参考のために申し上げた
ような次第であります。

（第一高等学校校友会雑誌所載の筆記による）

——大正二年十二月十二日第一高等学校において——

青空文庫情報

底本：「漱石文明論集」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年10月16日第1刷発行

1998（平成10）年7月24日第26刷発行

※底本で、表題に続いて配置されていた講演の日時と場所に関する情報は、ファイル末に地付きで置きました。

入力：柴田卓治

校正：双沢薫

2001年3月26日公開

2004年2月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

模倣と独立

夏目漱石

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>